

経済思想 期末レポート
結婚とその幸福度
経済学部2年10組 戸田文音

1. はじめに

人は結婚すると幸せになるのだろうか？近年、著しく晩婚化が進み平均初婚年齢はいわゆるアラサーと呼ばれる年齢まで向上している。社会構造や制度の変化が大きくこの変動に関わっていることは間違いない。1908年の段階で男性は26.8歳、女性は22.9歳だったがその約100年後、2016年になると男性31.1歳、女性29.4歳となり特に女性が大幅に上昇している。（※1,2）男性の所得の減少、女性の社会進出や平均年収の向上が晩婚化の理由としてあげられるだろう。では、多くの人々は結婚を希望していないのだろうか？全国の20歳～79歳の男女3000人を対象としたアンケートによると、未婚男女の七割以上が結婚したいと回答している。特に20歳～39歳の未婚者では男性79.0%、女性91.9%という結果が出ている。（※3）これほどまでに結婚を希望している人が多い一方でなぜ晩婚化という現象は止まらないのだろうか。晩婚化が進む今も結婚に憧れを抱く人が特に女性には多い。結婚に幸せを求める人々は実に多いように思う。様々な関係の形がある中なぜ結婚という選択肢を選ぶのか？では実際に結婚と幸福度に相関関係はあるのだろうか？

2. 現代における結婚というもの

人と人の助け合いが必要不可欠であった昔と違い、今の時代は余程の田舎でない限り一人で一生を終えることは可能だ。ここで上げるのは一例だが、まだまだ年功序列の風潮が残る現代日本において、いわゆる一般家庭に生まれ、一般企業に就職すれば、そのまま定年退職し年金や貯金で老人ホームに入居してそれなりに不自由のない一生を終えることもできるだろう。結婚すれば自分の血縁以外との様々な煩わしい関わりも増える可能性さえ高まる。ではなぜ結婚するのだろうか？それは現代社会にはびこる漠然とした不安や寂しさ、そして孤独が原因であるようだ。

前述した通り、過去人々は助け合わなければ生きて行けなかった。人と人との会話や関係が人を作っていたのだ。しかし今、特に都会では隣家と一言も話さずとも生きていくことができる。むしろ子供などは他人と関わらせることを嫌う傾向さえある。しかしこの社会構造こそが現代社会の不安を増大させているのではなからうか。またそういう一方で他人との繋がりを強く求めている。だからこそ結婚という手段を選ぶのではないだろうか。

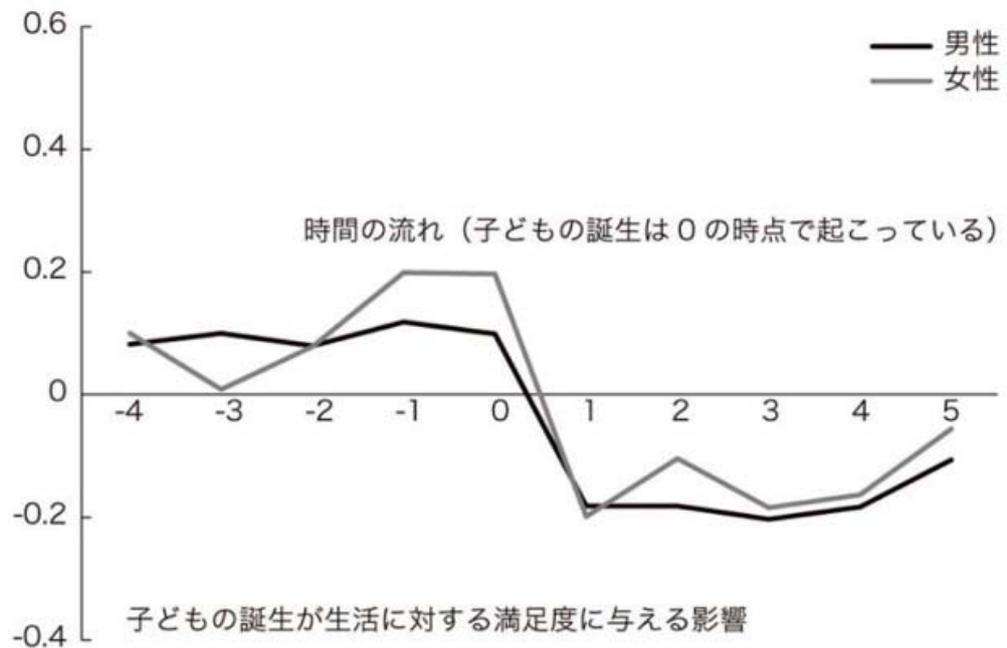
3. 結婚と子供

結婚を決断した、もしくは結婚した男女に待ち受ける次の関門が、出産、妊娠、つまり子供のことはなかろうか。子供が幸福度に与える影響というのは良くも悪くも大きい。子供を育てることは精神的な幸福感を高める一方で生活面、特に金銭面での幸福感を引き下げるとの研究結果もあるようだ。またその反面、子供がいる世帯の方が子供のいない世帯よりもうつ状態のレベルが高いという研究もある。子供が生まれることによって新たな不安が増えるかたわら、様々な刺激や幸福を得られることに違いはないだろう。

(※5) 子供を作り育てることは様々な新たな発見を得ることができ、また自身の人としての成長にもつながる。そのことは幸福度を上昇させるに違いない。では、子供が生まれることによる不安とは一体なんだろうか。それは様々なことが”わからない”ということだ。少子化の影響で、一生のうちに出産する子供の数は平均 1.43 人となっている。

(※6) そのため当然だが親戚などで幼児と触れ合う機会も減少している。今の人々はその知識不足をインターネットで補おうとする。しかしインターネットは便利な一方で偏った考えや間違った情報が錯綜している。そういった情報を鵜呑みにしてしまうことは当然ながら様々なリスクを孕んでいる。そして鵜呑みにしてしまったその結果一筋縄ではいかないことが当たり前の育児というタスクに、より一層の不安感を感じるようになる。また育児は他者との関わりの減少してしまう傾向にあり、不安や鬱憤を解決、発散できないまま生活することになりがちだ。上記では女性の不安について言及したが、男性にも当然不安はつきまとう。特に男性は育児に参加したくとも参加できないケースが数多く存在する。仕事が忙しく育児に参加したくとも、未だ育児休暇を取りづらい会社がほとんどであり積極的な育児参加は難しいのが今の日本の現状と言えるだろう。参加機会が少ないことは当然だが不安感の増長に繋がる。しかし、夫婦間のコミュニケーションが多ければ多いほど男女両者の不安感が少ないことが研究として出ている。こういった不安は幸福度を下げるが、下げない努力をできる項目ではあるのではないだろうか。また、不安というと金銭面でも当然子供という存在が家計を圧迫することは間違いない。一人前まで育て上げるのにかかるお金が三千万円ほどであるという事実はよく知られているだろう。また、子供をもつ人と持たざる人の幸福度には大きな違いはないようだ。子供を出産しその後一年の幸福度をお金に換算すると約 31 万円の予期せぬ収入があったのと同じぐらいという調査すらでている。

図 14



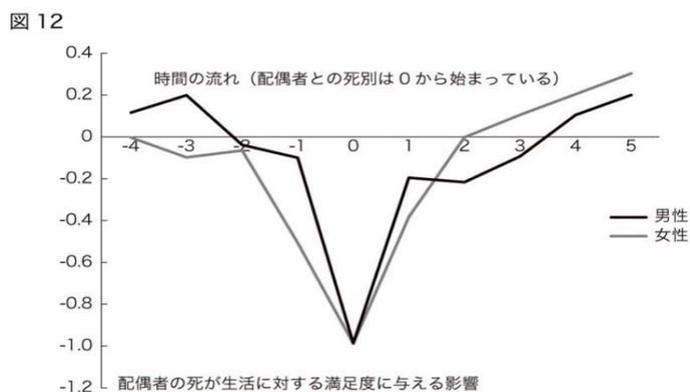
また、このグラフ（“幸福の方程式”より引用）からも分かる通り男女ともに幸福度は出産後すぐの5年間、出産前の5年間の幸福度を下回っている。子供が上がるにつれてその幸福度が上がっていく理由には、子育てへの慣れ、子供との意思疎通など”わからないこと”が減少することが挙げられるだろう。子供がいない人々に子供がいる人々の幸せや不幸がわからないことと同様に、子供がいる人々に子供がいない人々の幸せや不幸がわからない。ある選択をした結果として現在の状況に至り、その結果今幸福であったとしてもそれ以外の選択をした場合どうだったかはわからないのは当然だ。故に幸福を比較することは難しいが、双方それぞれに不幸と幸福を享受しており子供がいることは多くの幸せをもたらす一方でいない人々の幸福度と比べるとその幸福度は大きくは変わらないと言えよう。

4. 結婚と離婚

様々なリスクや可能性を踏まえ一度選んだ結婚という選択も場合によっては長くは続かない。その先一生を終えるまでの約60年間、相手と添い遂げるとは限らないからだ。お見合い結婚と恋愛結婚という風に結婚の形は大別できるが、お見合い結婚の場合その離婚率は約10%の一方で恋愛結婚は40%以上にも昇るようだ。（※7）この理由としてはお見合いの場合相手への期待値が元からさほど高くない場合が多く様々な面を妥協することが可能だからではないかと考えられる。また結婚の形にとらわれず離婚率を合算すると2016年の統計で婚姻件数約62万1000件のうち離婚件数は約21万

7000件、およそ三組に一組にのぼる。(※8)離婚原因を男性の場合、性格の不一致、異性関係、モラハラとも言われる精神的虐待などが上位にランクインする一方、女性の場合は同じく性格の不一致、肉体的暴力、そして生活費を渡さないこと、などのようだ。結婚にも様々な判断材料が存在したが、離婚も専業主婦のような立場の人々にとってはより大きな決断を迫られる場に違いない。しかし果たしてその大きな決断をして離婚したところで幸せになれるのだろうか？別れずにそのまま不幸でいるか、離婚してより幸せになるか、という選択肢がよく出されるが、不幸な結婚を続けた3分の2が、5年後には幸せになっているとの報告があるそうだ。離婚の苦しみから立ち直るには平均してわずかに男性は2年、女性は3年だそうだ。さらに衝撃的なことには、不幸の度合いが高い夫婦ほど劇的変化が見られ、不幸だと思いながら別れずにいた多くが5年後幸せに暮らしているという調査報告も存在する。このデータは多くを対象にしたものではなく、公平性に欠ける面もあるがこの結果は離婚を決意する人々にとっては驚くべきものだろう。また、結婚した際人は45万円分の幸福度を感じるとする調査結果がある一方で離婚の最初の年の精神的苦痛を埋め合わせるには約100万円の臨時収入が必要だという調査結果もある。それほど離婚という行為はリスクが高く幸福度を下げるものなのだ。その上離婚という行為はマイナスからの脱却ではある一方で自信を高めたり達成感をもたらしたりするものではない。およそ行為というものはそこに根本的なプラス要素や動機がない限り精神的な好転は難しいものものだろう。

離婚とは話はそれるが、配偶者との死別が幸福度に与える影響も見ていきたい。配偶者の死は当然幸福度を大幅に下げる。金銭に変換するとこのような辛い喪失感を経験しなかったのと同程度の幸福度は4000万円ほどの臨時収入に匹敵するようだ。しかし下図のグラフからも分かる通り死に対する立ち直りは男女ともに、特に女性は驚くほど早い。わずか2年で死に順応してしまうのだ。



また配偶者の死に比べて、子供の死というものは1500万円ほどの臨時収入で埋めることが可能だといういささか意外な調査も残っている。母親が母親にとっての配偶者である父親の死より自身の死により悲しみを感じるはずだと考える人々も多いのではないだろうか。しかし、父親を収入源とする家庭ならば父親の死によって全ての生活が変わってしまう。そういった生活面、金銭面での幸福度も含めた上での調査なのだろうと考察した。

5. 終わりに

結婚、子供、離婚などの観点から幸せというものを考察したが、実際幸せに絶対的な条件はない。幸福の感じ方、感じる度合いはたとえ同様のことが起ころうとも千差万別であり一概には言えないものであるからだ。前述した通り、結婚は昔と違い必ずしも幸福に必要な不可欠なものではない。政治体制などにも様々な不安があり到底若くして軽々しく結婚したい、子供を作りたいと考えられるような状況ではないが、より前向きに考え実践することは高齢化に歯止めをかけ、社会全体の幸福につながるのではないだろうか。社会の幸福度を高めることは自身の幸福にもつながるのではないだろうか。幸福実現の方法に絶対的な正解はないが、結婚という手段を一向するのも悪くないのではなかろうか。

引用文献

幸福の計算式：結婚初年度の「幸福」の値段は2500万円!? 著者：ニック・ポータヴィー

※1 内閣府 平均初婚年齢の推移

https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/html_h/html/g3350000.html

※2 初婚年齢の推移

<https://news.yahoo.co.jp/byline/fuwaraiizo/20171227-00079692/>

※3 少子化の原因

https://www.huffingtonpost.jp/2014/05/01/nakakufu_n_5244767.html

※4 国立保障・人口問題研究所

http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G_html10.html

※5 子供を持つ若年層を対象とした幸福度に関する研究

http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis295/e_dis295.pdf

※6 平均出生数

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ031269800R00C18A6EA4000/>

※ 父親の育児不安に関する研究

https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/950/KJ00000699752-00001.pdf

※7 横浜結婚相談所

<https://www.yokohama-ryoen.jp/154674214>

※8 日本の夫婦の離婚率

<https://ricon-pro.com/columns/81/>